

第十四話 適正な蔵書数って、ある？

●「愛妻物語」では本箱二つ

いったい、どれだけ本を持てば、快適な読書生活を送れるのか。その答えは、人や住居関係によるだろう。学生のころ、下宿だったときは、それほど恵まれた住環境にない。せいぜい本棚は二本から三本。あとは床に積み上げる式。限界があった。買った本はたいていちゃんと読んでいたから、それで充分とも言えた。

そのうち、転居を重ねるごとに、部屋が増えていき、住環境のサイズに合わせて、蔵書も増えていったのである。いま考えると、下宿生活の出発点となった、四畳半のコンパクトな部屋が懐かしい。二つの本棚に文庫新書用の本棚が一つ。あとはカラーボックスを横倒しに二つ積み、そこにレコードを入れていた。寝るときは蒲団を敷く。すべて、手を伸ばせば何でも用が済むコクピットのような部屋で、そういうものだとも最初から覚悟していれば、さして不満はなかったのである。

そう考えると、適正な蔵書数とは、どれぐらいのものだろうか、と考えてしまう。

増え過ぎた本のために、別に部屋を。あるいは、前回ご紹介したように、コンテナ（倉庫）を借りる人もいる。もちろん、余計な家賃や借り賃がそこにかかる。本を部屋に持たない人にとっては、まったく理解不能な無為な行為だと思う。

映画監督の新藤兼人が、若き日の自分をモデルに撮った「愛妻物語」では、シナリオ作家を目ざす主人公（宇野重吉）は、のちに妻となる女性（乙羽信子）の家の二階に下宿している。六畳間ぐらいだろうか。部屋には机以外の家具はなく、本棚が二つ見える。文学青年で、シナリオを勉強中の青年という設定だから、「男はつらいよ」の寅さんのことばを借りれば「さしずめ、インテリだな」という範疇に入ると思われる。身過ぎ世過ぎで、日々汗して働いて家族を養う同世代の男性とは、文化的条件が違うわけだが、蔵書は本箱二つつきり。ちょっと少ないように思うが、これで充分だったのかもしれない。

のち、下宿の娘と駆け落ち同然で京都へ移り住んだ主人公は、師とも言える巨匠の映画監督（溝口健二がモデル）に、書いたシナリオを根本から批判され、一から勉強をしないのだ。

「愛妻物語」の青年の蔵書は、映像からの推測にすぎないが、最初の下宿ではざっと五百冊。京都へ移ってからは、世界戯曲全集といったシリーズひと揃いが増えて、それでも千冊には届かないだろう。

資料や事典の類は常時必要となるが、ほかの本は、そうひんぱんに読み返すわけではない。愛読書と言えるものを除けば、読後すぐ処分してしまうとしたら、むやみに蔵書を増やす必要はないとも言える。「愛妻物語」は昭和初期から戦中にかけてを時代背景としてい

るが、この頃、木製の本箱が主流。コクヨのスチール本棚なら、五段式で二百冊は入るが、木製の本箱はそんなに入らない。本箱の上の空間に積みあげて、ようやく一本で二百冊ぐらいか。それに机の上や周囲にも置くことを考えて、五百冊という数字を割り出した。当たらずとも遠からずといったところだと思う。

いまとは出版事情も違うし、本の値段も今より高かった。貧しい青年が蔵書家になることは困難だった。五百冊あれば、まずは大したものと言える。

一八九〇年生まれの子田春月は、大正六年に処女詩集『靈魂の秋』でデビューし、流行詩人となり、のちアナキズムに傾斜して『虚無思想の研究』を著す。大正期を代表する文学者の一人だが、昭和五年に瀬戸内の海に投身して生涯を終える。

「日本古書通信」掲載の小出昌洋「随讀随記」に、子田春月の蔵書について、死後に満州国立図書館へ寄贈されたと書かれている。その数、七百五十冊。やっぱり、そんなに多くはないのである。

●本は五百冊あればいい

「書棚には、五百冊ばかりの本があれば、それで十分というのが、吉田さんの口癖だった」と書くのは篠田一士（『読書の楽しみ』）。ここに出てくる「吉田さん」とは、吉田健一のこと。吉田健一が何者か、を改めて紹介するのは野暮な気もするが、いちおう。吉田茂の長男として生まれ、戦後に『英国の文学』を皮切りに英文学者として出発、評論、小説、随筆の分野で一家を成し、集英社の著作集を始め、全集、著作集の類が数種ある。篠田一士、丸谷才一など、同時代の物書きに信奉者を多く持つ。いまだに人気の衰えない作家である。

シェイクスピアもボードレーも諳んじて、原典にあらず引用できたと言われる教養人だった吉田にして、本棚に五百冊というのはにわかには信じがたい気もするが、蔵書が少なかったことについては、ほかに証言もある。

英文学者の西村孝次は、吉田健一と雑誌「批評」をやった仲。『休み時間の英文学』に、昭和十四年の吉田健一との交遊について触れている。

「当時、吉田健一は諏訪町に住んでいて、ぼくらはよくかれの家に集まっては放談した。そこは、一種の梁山泊だったという。当然ながら、酒となる。

「さて、その亭主の蔵書だが、それはかれの酒量と反比例を示していた。少なくとも当時はそうだった。ただ、そのなかに、ストレイチーのものだけは全部揃っていた。それがぼくにはひどく羨ましかった」

そう述懐している。ストレイチーとは、ブルームズベリー・グループの一員で、イギリスの批評家、伝記作家。ここで触れられているのは、おそらく原書で、昭和十年代にはおいそれとは手に入らなかったのではないか。

ともあれ、吉田健一は一貫して、蔵書を多く持たなかったようだ。ただ、その五百冊は、

本当に必要な、血肉化した五百冊だった。その五百冊について、篠田一士の文章を改めて引く。

「本は五百冊あればというのは、ズボラか、不勉強かとは逆に、よほどの禁欲、断念のはてに実現するもので、これを実行するには、並大抵の精神のエネルギーではかなうことではない。一日に三冊もの本を読む人間を、世間では読書家というらしいが、本当のところをいえば、三度、四度と読みかえすことができる本を、一冊でも多くもっているひとこそ、言葉の正しい意味での読書家である」

吉田健一こそ「そういうひとだった」というのだ。

篠田はまた、こうも書く。

「自分の書棚には、時に応じて、自在にページをひるがえすことができる本が、五、六百冊もあれば十分、その内訳が少しずつ変わってゆくというのが、いわゆる完全な読書人なのである」

五、六百冊といえば、スチールの五段本棚にすると、三本分ほどの冊数か。しかも前後二列にせず、すべて背が見え、いつも全貌が見渡せるのがこの数字。たしかに、リファレンスの便を考えれば理想の冊数で、いつでも欲しい本が見つげ出せる。あれはどこへ行ったっけ、たしか持っていたはずだが、探すとなると一日仕事だよ、それなら、いっそ新しく買いなおしたほうが早い……なんて悲喜劇はなくなる。

●五百冊蔵書は苦難の数字

スチールの本棚を三本。そこに、いまや入手困難な本や、自分にとってオールタイム・ベスト100というべき愛読書、資料としてひんぱんにページを開く本など、選りすぐりの本だけを置き、それ以上は増やさない。ある意味、それは理想の蔵書と言える。もの書きなんて、辛気くさい仕事を辞められたら、もしそのあとも、経済的に悠々と暮らしたら、夢見るのはそういう蔵書だ。

しかし、私の場合、なかなかそんなふうにはうまくはいかない。書評、古本エッセイ、それに本にまつわるさまざまな原稿を書いている職業的な立場から、どうしても本が必要となる。それも「本」に関する本は不可欠だ。各種出版史、編集者の回顧、古本に関するエッセイ集や古書店主の書いた本、書評集、読書論の類は、どれを残して、どれを処分するという判断が難しく、ずるずると増えていく。おそらく、これら「本」に関する「本」だけで千冊以上は軽く所持している。もうそれだけで、理想の「五百冊」を超えてしまっている。

「どれぐらい、本をお持ちなんですか？」という無理難題な質問に、いつも、ざっと二万冊と答えてはいるが、あまり根拠はなく、一軒の古本屋にはそれぐらいあるだろうと思っているからだ。その二万冊を、事情があつて五百冊に減らす日が来たとしたら、これはもう選別することは不可能だ。半分にあっさり減らすことは、たぶん大丈夫だと思う。

しかし、その先、半分の半分、そのまた半分の半分と数千冊単位になると、愛着の濃縮度が大きくなってくるわけで、心は千々に乱れて、收拾がつかなくなるはずだ。

二万冊を五百冊に減らすとしたら、それはもう、いったん全てを処分してゼロに戻し、それから欲しい本を五百冊、改めて蒐集していくしかないと思う。はっきり言って、常時、本を商売道具とする私の執筆活動における現状では、五百冊というのは苦難の数字だ。

ただ、何かの間違いでベストセラーを当てて、数億円の印税が入ったら、甲府か信州に別荘でも買って、そのときは五百冊蔵書を実現させられるかもしれない。自分がいま持つ本は、そこへ運ばず、重複を承知で一から蔵書を作るのだ。それも五百冊と限定して。それなら可能（ベストセラーで数億印税は限りなく不可能）である気がする。

收拾がつかなくなり、重荷となった蔵書をいったん忘れて、また新たに、本を買えろとしたら、こんなぜいたくな話はない。億の印税も、別荘も持たないうちから、考えるだにわくわくしてきた。しかし振り向くと、本棚からはみ出た本が山を成し、床が埋めつくされ、通路はふさがれているという、うんざりするような状況なのだ。

●五百冊は多すぎる

いや、五百冊ならまだ多い。本はそんなにいらぬよ、と身軽な作家もいる。

吉行淳之介もかぎりなく蔵書を多く持たないように心掛けた作家の一人。

これも、篠田一士『読書の楽しみ』で披瀝されているエピソードだが、吉行の家を訪ねた音楽評論家の吉田秀和が驚いたという。

「いつ行っても感心するのは、部屋に本が一冊もないこと」。二部屋に大判のデッサン集が部屋の隅に無造作に立てかけてあった光景が印象的だった。これは、吉行が自分の蔵書を人に見られることをひどく嫌ったため、どこかに隠してあったとも考えられる。

特殊事情による極小蔵書、というものも存在する。「獄中」もその一つ。

社会主義者の荒畑寒村、本名・勝三は、一九〇八年に赤旗事件により入獄し、そのおかげで、いわゆる大逆事件の連座を免れ、昭和五十六年まで生き延びた。その入獄中、さかんに読書し、英語の勉強をしたのは有名な話。

当初、獄中に差し入れられる本の冊数は一カ月に三冊と決められていたが、これを不服に思った寒村は、冊数増加の要求。なんと、一カ月九冊までを認めさせた。大したものだ。

英語を学ぶため、バーネットの英訳によるツルゲーネフ全集をひたすら読んだ。最初、新本だった三省堂版『新英和辞典』は、バラバラになってしまったという。五百冊どころか、所持できるのは九冊。次の差し入れがどれほど、待ち遠しかったことだろうか。

いや、九冊でもまだ多い。谷沢永一『紙つぶて』（文春文庫）によれば、高群逸枝はもっとすごい。なにしろ「世田谷で5坪の書齋、机の上に『古事記伝』一冊をのせ、37才から死まで34年間、日本女性史研究」をやり続けたというのだ。もっとも、机の上には一冊かもしれないが、背後に書棚があって、そこに本がずらりと並んでいた可能性がある。

本当に本を持ってなかったのが稲垣足穂で、これは自分でもそう書いているし、訪ねていった人も驚いている。「dankai パンチ」の書齋特集のアンケートに、森永博志は以下のように答えている。

「一冊も本を持っていなかったという稲垣足穂の和室が理想かな。足穂はライト兄弟の野営テント空間が、一番と言っている」

この足穂の無一物に憧れたのが殿山泰司。

「なにしろイキがって稲垣足穂先生のマネをして、オレは周辺に一冊の書籍もおかず書いているもんじゃけえ、こんな場合調べようがなくて困っちゃうのよ」（『殿山泰司のミステリー&ジャズ日記』ちくま文庫）。

『ミステリー&ジャズ日記』を読めばわかるが、殿山は大変なミステリー愛好者で、ほぼ毎日のように内外のミステリーを読んでいる。「周辺に一冊の書籍もおかず」と書いているなかに、ミステリーは含まれていないのかもしれない。それでも、蔵書家と名乗るほどではなかったに違いない。

● 「いつか読書する日」

さきほど、映画「愛妻物語」に出てくる本棚の話をした。本棚の出てくる映画はいろいろあって、一冊の本が書けてしまう。一冊どころか、飯島朋子は『映画の中の本屋と図書館』というタイトルで、前後編と二冊も本を書いている。

本好きならわかると思うが、映像のなかに、少しでも本や本棚が映ると、すぐにそこへ目が行ってしまう。本なら、それが何の本か、本棚ならどんな本が並んでいるか知りたくなるのだ。せっかく美女が魅惑的な表情を浮かべていても、本が映っていれば見るのは本だ。因果な趣味だと思ってしまう。

映画の内容はともかく、映像として本棚が映っている光景がいいなあ、と感心したのが「いつか読書する日」（二〇〇五年公開）。監督の緒方明は「独立少年合唱団」で、ベルリン国際映画祭新人監督賞を受賞した実力派。

結末のつけ方にやや違和感があり、絶賛とはいかないが、坂の多い長崎の町の風景や、そこで暮らす人々の息づかい、たたずまいの捉え方は、私好みであり、もう一度観たい映画の一つだ。なによりヒロインの大場美奈子（田中裕子）が、大の読書家という設定がいい。

彼女はこの町で生まれ暮らし、かつて、三十年以上前に高梨槐多（岸部一徳）と幼い恋を交わらせたことがあったが、事情があって別れた。いまは、美奈子は独身のまま、槐多は病身の妻（仁科亜季子）と同じ町に暮らしている。

美奈子は、朝は牛乳配達、昼間から夕方は坂下の小さなスーパーでレジ打ちをして生計を立てている。住まいは古い一軒家で、親と一緒に住んでいた時代からの持ち家らしい。美奈子を演じた田中裕子は、この映画の撮影時に五十歳が目前、という年になっていた。

化粧っ気もオトコ関係もなく、忍んで生きてきた長い疲れを体全体からにおわせて、田中裕子はまったく見事に美奈子を演じてみせた。映像にしにくい、坂の表情をうまく映画に生かしているのも、この映画の手柄。緒方監督は、九歳から十五歳までを、坂の町・長崎で過ごしている。

さて、本棚の話。具体的に、美奈子の住居の間取りを説明するシーンはないが、家具はなく、ただ本棚だけが壁に据えられた四畳半の部屋があり、ここが美奈子が美奈子でいられる本拠地だ。ここで、就寝するまで、ひとり静かに読書して時間を送るのが美奈子の日課なのだ。

●美奈子の本棚

さいわいなことに、この映画には、シナリオを中心に映画の撮影秘話なども加えた『いつか読書する日』というタイトルの本が愛育社から出ている。これをもとに、美奈子の本棚を覗いてみることにする。

「シナリオ」編の「シーン062」に、美奈子が読書する描写がある。

「暗い部屋である。ポソポソと美奈子の声が聞こえている。

その声は、寝室のほうから聞こえて来る。

美奈子の寝室、壁には本がぎっしり詰まった古い書棚。

本は、古い愛蔵版文学全集や小説本が並んでいる」

本棚で壁を埋めつくす四畳半の隣に寝室があり、そこもまた、壁には「書棚がある」。まさに「本の家」である。

本書のなかに、「大場美奈子さんの本棚より」という章があり、構成者の青木研次が美奈子の読書環境について解説している。

「大場美奈子さんの本棚は、彼女の寝室の隣の4畳半ほどの部屋にあります。

奥の壁と、両側の壁が天井の高さまで本で埋まっていて、

窓のない部屋なので、本でできた穴蔵のような感じがしますから、

はじめて見る人はびっくりするかもしれません。

本棚の本は全部が大場さんが買った本ではなくて、

お父様のやお母様のも混じっているようです。

左側の壁にある本棚と奥の壁の本棚の間には、50センチ位の隙間があり、

そこに木の椅子が一脚はめ込まれたように置かれています。

大場さんはそこに座っている時が一番落ちつくんだそうです」

同じページに、その部屋で座り込む美奈子のショットがスチール写真で掲載されている。青木解説とその写真から想像するに、四方の壁のうち、本棚のないのは、美奈子が背をもたれかける一辺だけで、あとの三辺はすべて本棚が並ぶようだ(カタカナの「コ」の字型)。本棚に統一はなく、本が増えるにしたがって、継ぎ足し継ぎ足しで揃えていったと想像できる。

●美奈子はこんな本を読んでいる。

タテ一列のヨコ一段に約十五冊。本棚と天井のあいだにも本が積まれて、段に換算すれば九段。それが奥の壁に五列。文庫などもあるようだから、「コ」の字の短い一辺に、約千二百冊が埋まる。それが二辺。長い一辺には、その一・二倍と概算して、要するに、美奈子の「本棚の部屋」には、四千冊近くの蔵書があると考えて、大きな狂いはないと私は見た。寝室の本棚にどの程度の本があるかはわからないが、これをプラスして、ざっと五千冊か。

大学の教師や研究者、それに職業的もの書きで、ようやく手が届く蔵書数で、よほどの本好きでないと、これほど家に本を持っている人は少ないだろう。これを引越させると考えたら気が遠くなる。いわゆるミカン箱サイズの段ボール箱に、単行本と言われる書籍は五十冊も入らない。四十冊ぐらいか。美奈子さんの場合、文庫より単行本の量が圧倒している感じだが、すべて単行本だと割り切って、これも概算に過ぎないが、約百二十個の段ボール箱が必要となる。

青木解説は「古い文学全集(昭和30年代あたりか)の日焼けした箱がいい味を出しています。／う～ん、いったい何冊ぐらいあるんだろう」と、冊数をぼやかすことで、かえって蔵書の多さを強調している。

「大場美奈子さんの本棚より」が洒落ているのは、「大場さんに好きな本や思い出の本を選んでもらいました」として、十冊の本が選ばれているところだ。すべて書影入りで、しかも美奈子が文章を書いた、というスタイルの解説文が付いている。選ばれた本を挙げておく。

- マルタン・デュ・ガール 山内義雄訳『チボー家の人々』(白水社)
- フィリップ・ロス 佐伯彰一訳『さようならコロンバス』(集英社)
- チャーザレ・パヴェーゼ 河島英昭訳『美しい夏』(晶文社)
- アン・モロワ・リンドバーグ 吉田健一訳『海からの贈り物』(新潮文庫)
- 吉山寛 石川美枝子・絵『原寸イラストによる落葉図鑑』(総合出版)
- カーター・ブラウン 田中小実昌訳『おんな』(早川ポケットミステリー)

リチャード・ブローティガン 藤本和子訳『アメリカの鱒釣り』（晶文社）
小島信平・松本政利『おそうざい十二ヵ月』（暮しの手帖）
エーリヒ・ケストナー 高橋健二訳『飛ぶ教室』（岩波書店）
織田作之助『夫婦善哉』（新潮文庫）

美奈子の年齢は五十歳で、二〇〇五年公開をリアルタイムとすると一九五五年生まれ。これは美奈子を演じた田中裕子と同じ。五七年生まれの私ともほぼ同世代。だから、このラインナップはよくわかるのだ。外国文学が多いこと、十冊のうち、二冊が晶文社の本であることに、美奈子が生きた時代を感じる。

しかも、それぞれ新装版が出ていても、美奈子（あるいは親）が入手した時代にあわせて、書影には古い版を採用している。『チボー家の人々』は、今なら白水社から軽装の新書サイズのバージョンが刊行されているが、戦後世代は、この簡素な函入りの本体が黄色い表紙の『チボー家の人々』に愛着がある。

高野文子の傑作マンガ『黄色い本』は、やはりこの「黄色い本」バージョンの『チボー家の人々』を、高三の主人公・田家実地子が学校の図書館から借り出して、読み続ける話。舞台は高野文子の出身地である新潟県の小さな町を想定しているようだが、実地子は高校卒業後、メリヤス工場へ勤めることが決まっている。時代設定を高度成長期としたら、実地子もまた、美奈子と同じ時代を生きた本好きの娘ではなかったか。